山岳展望十七号から山岳文化へ

田中文夫

「また、あのような論文を書いて下さい。ずっと気になっていた」

山岳文化学会、設立総会のスピーチを終えた斎藤会長は、席に戻ろうとして私の名札を見付け、声をかけられた。それまで斎藤会長と面識はなく、まったくの初対面。しかしその一瞬は何となく、ずっと前から知り合いだったような雰囲気がありました。

二〇〇三年三月八日、山岳文化学会設立総会。

その日、私は遅刻してしまった。

すでに総会は始まり、満席の熱気と斎藤会長のスピーチの中に私は入った。空席を見付けたのは、最前列のたった一つ。立ちんぼうも変なので、仕方なく勇気を出して最前列のその空席を埋めることにした。

実にこの席が、スピーチ中の斎藤会長の席だったことに気付かされたのは、スピーチが終わってからのこと。スピーチを終えた斎藤会長は落着いて、冒頭の一言とともに中央の席に移って行かれた。

山岳展望十七号が発刊されたのは、一九七三年九月。その後は途絶え、現在に至っている。山岳文化学会設立のこの日から、遡ること丸三十年。

二〇〇四年十一月、日本山岳文化学会第二回大会。

文献分科会により、山岳雑誌の創刊とその時代背景の研究発表がされました。発表者の植木理事は神奈川岳連、横浜山岳協会における大先輩。発表の最後は「山岳展望」創刊で締め括られた。会場ロビーには、残されていた僅かばかりの「山岳展望」創刊号が並べられています。

この「山岳展望」創刊の中心が、これまた斎藤会長であったことを、私は三十六年前から知っていた。

一九六八年十一月、山岳展望十二号発刊。

この号から編集同人は一変し、若手に切り替えられています。その中心人物が岩崎元郎氏であり、佐内順、武藤昭、佐々木誉実、山田裕紀氏らであった。遅れて、大内直樹、柏瀬裕之、遠藤甲太、小泉共司、杉山美裕氏らが参加した。

これに先立つ二年前、遠藤登氏を隊長として、東京都山岳連盟有志により、正月の韓国遠征が行なわれた。渡航自由化前の一ドル三百六十円、個人負担は百ドルで、ウルサンバイの垂直な花崗岩に、新らたなトレースを刻んでいた。

当時コンテニュアス・クラブに所属していた二十歳の私も、この遠征に参加した。昭和山岳会から参加した、一歳

年上の岩崎氏とは意気投合。大いに山と青春を語り合っていた頃でした。

そんなことから、山岳展望十二号、編集同人末席に私も加わることになります。

新宿、線路脇のヴォルガ、酎ハイと焼き鳥を口に、夜更けまでそれぞれの山を熱く語り合った編集同人達。

十二号から十四号までは、斎藤会長が営まれている岩峰社が出版所となり、そこに勤めていた岩崎氏自らがタイピストでもあります。私も岩峰社を訪ねたことがありますが、斎藤会長にお目にかかる機会は一度もありません。

この十二号、山岳展望は岳界重鎮の手から若者達の手へと、一挙に世代交代をしたのです。

イデオローグは佐内氏（故人）。しかし若輩の浅薄さは否めず、藪の中からヒマラヤを展望しているようなものでした。井の中の蛙と、そこには確かな山岳界への展望も含め、押さえきれない青春の夢や正義な願望が自ら先走っていたように思い返せます。

皆、若かった。

それはロゴスからパトスへのバトンタッチでもありました。若者達は理屈より、まず実践に立ち向かって行きました。日本の厳冬の岩壁から、ヨーロッパアルプス、ヒマラヤの岩壁へと、より高く、より困難なルートを求め、実践と実績を競います。

ヴォルガから、一ノ倉沢の雪に消えた人もいます。

実績少ない若者がいくら念仏を唱えても、説得の言葉の重みがありません。そんなことより、アイガー北壁、エヴェレスト南壁（南西壁）へと挑戦するほうが、より現実にアピールできた時代が、すでに始まっていました。

山岳をソフト（知能・文化的）と共に楽しむより、ハード（記録・文明的）な進化の楽しみへと偏っていった。未知に向かい、アルプス、ヒマラヤへと、若者達はエネルギー放出の舞台を求め、世界へ羽ばたいて行きます。右肩上がりな成長社会は、ソフト∩ハードのバランスよりも、アンバランスな突出事象（新記録性）に魅力を覚えます。

そのような中では山岳を展望（ソフト）する書き手の評価は定まらず、書き手もだんだん品薄になってゆきます。十二号からの山岳展望は、毎年一冊をようやく発刊。五年を経て、やっと十七号へと辿り着きます。

一九七三年

ヒマラヤ登攀満開でした。日本でも山岳ガイドを業とする、プロガイドが出現。そのプロガイドが隊長となってヒマラヤ遠征を計画していた登山隊へ、日本山岳協会は推薦状発行対象としないことにしていました。

いわゆる山岳界のアマ・プロ問題です。

ブランデージ会長率いる時のオリンピックは、アマチュアの祭典としプロは排除されています。山岳の社会も、ア

マチュアを全国組織する日本山岳協会が、日本を代表する組織とされていました。

ヒマラヤ等の遠征では、その国を代表する組織からの推薦状を添え、当事国へ許可申請を行なう規則がありました。

日本クライマースクラブが計画したＰニ九西壁、埼玉岳連が計画していたナンガ・パルパット、それぞれ隊長とする古川純一、飯塚誠一氏をプロガイドと称し、日本山岳協会は推薦状発行対象と認めません。

山岳展望十七号ではこのことを軸に、編集をまとめることになります。当時、エヴェレスト南西壁を計画されていた湯浅道男氏、マカルー東南稜が終わったばかりの原真氏の二人に、執筆を依頼することになりました。依頼は私が担当。執筆依頼の要旨を長文に書き記し、古川純一氏の添え状を付けて依頼しました。

結果、湯浅氏からの返信はありません。原真氏は書きたくないテーマであることの断り文と、代わりの原稿として「奥山章氏と私」を戴くことが出来ました。

さて、十七号の書き手が見つからないまま時は過ぎてゆきます。仕方なく、それまで依頼文を書いていた私が書くはめになります。一ヶ月間毎日、昼休み、渋谷の喫茶店でコーヒーを飲みながら、百二十枚の原稿「日本山岳協会への批判」を書き上げました。

次は岩崎氏が和文タイプライターと格闘。ようやく十七号発刊にこぎつけたのです。

十七号発刊の翌年（一九七四年）、杉山美裕君と私も例外になく、ヒマラヤの岩壁を目指しました。古川氏を名目上「総指揮」と称し、実質面では隊長。私が申請上「隊長」と記述し、実質は登攀隊員。こんな建前上の簡易なトリックで日山協推薦状を得、横浜山岳協会隊はＰニ九南西壁登山へと出掛けて行きました。

さらに四年後、私は再びＰニ九南西壁登攀へと出掛け、山岳展望の声はすでに聞こえなくなっていました。

最後となった十七号、「日山協批判」への反応は聞こえません。ただ一人、原真氏からは所感の葉書を戴きました。そしてもう一人、朝霧山岳会・梶山幸佑氏は過去に、「読んでる人は読んでるよ」と、電話のお話を戴いたことがあります。

以来、山岳展望は・　・　・　休眠。

あれから丁度三十年が過ぎました。

二〇〇三年三月八日、山岳文化学会設立。

眠りから覚めた山岳展望は、今その名を変えて甦ったのだ、と私には思えてきます。しかももっと重厚に、もっと幅広く、そして山岳のすべてを網羅する、私も大好きな「山岳文化」となって。

「またあのような論文を書いて下さい。ずっと気になっていた」

斎藤会長から戴いた初対面での一言は、確かに三十年前、山岳展望十七号・「日本山岳協会への批判」を「読んでいる人がいた」ことの証でした。

しかも斎藤会長は、当時私が批判した日本山岳協会会長を歴任された後でもあります。更に偶然は重なり、日本山岳協会（現）会長・田中文男氏と私とは、男と夫の漢字違いな同姓同名発音ともなっています。

三十年の熟成。

山岳展望から山岳文化へ、そして日本山岳文化学会へと歴史は受け継がれました。この歴史の軸となり、今もって活躍される斎藤会長の、山と文化と実践への飽くなき探求は、あの頃若者だった私達には今もってお手本となります。

若輩なる私は今再び、その社会的役割も加味した確かな継承をしなければならない、と思っています。そして山岳文化には、次なる二つの方向があると思うのです。

一つは山岳文化の総体を文化伝承のＤＮＡとして確立させ、歴史的検証にも耐え得るような内向きな方向。

もう一つは山岳文化の視点から、山岳を取除いても通用する二十一世紀文化として、いかに役立つ発信ができるかとする外向きな方向。

「環境の世紀」と言われる二十一世紀。山岳の大自然の中で活動を重ねてきた山岳人と山岳文化にとり、まさに現代と未来社会に向かって物言う時ではないでしょうか！

「環境」を特定分野の専門家だけのものにしてはなりません。地球に住まう一人ひとりが身の回りの問題と捉える時、地球に住まう一人ひとりが当事者であり、環境専門家でもあり得ます。

そして非日常的山岳に分け入った山岳人から捉える環境は、日常社会に住まう普通の人々の環境認識とは異なった、より多彩で繊細な経験を加味することができるはずです。

山岳文化から環境社会へ向けた様々な発信こそが、かつて山岳展望が途切れてしまった無意味さを、現在有効なものへと変換できる情報提供が図れるのではないでしょうか。

エヴェレストが登頂されてから半世紀がすぎました。山岳社会は、成長の限界を迎えていた半世紀の中で多様化してきましたが、その秩序は今だ混沌の中にあります。混沌こそ自由の本質であるでしょうが、自由とはまさに秩序が意味を成さない状態でもあります。

それはまさに、第二次世界大戦に敗れ、戦後六十年を迎えた日本社会の現状とも重ね合わさります。その中で唯一なスタンダードとして登場したのが経済指標です。

では新たな秩序として、第四十三代アメリカ大統領ジョージ・ブッシュらが求めるキリスト教的「フリーダム」で

良いのでしょうか？私には同意できません。

終戦の翌年に生まれた私には、大自然の中で山岳と対峙する機会を持つことができました。私という人格にとって、自由とはある限られた範囲や状況における選択の自由さとして存在しています。その中で自ら選択できる意思が、私という人格を形成してきました。そして様々な体験の中から、私が私という人格に収束することが、なんとも無意味な作為であることを認識するに至っています。

私という意識における自我と、社会を構成する単位となる私という存在から、誰しも離れることが出来ません。ソフト∩ハードのバランスを図ることは、人間として生きるそのことでありました。

二十一世紀の文明は、第二次産業革命ともいえる電子技術革命でもあります。二十世紀の機械産業によるエネルギー多消費型社会から電子情報社会へと移行し、省エネルギー型社会へと変革を遂げています。

私という人格でさえ、様々なデジタル情報に分解されて蓄積可能となります。それらの情報を再度組み立て直して私という存在が復元される。どれがオリジナルな私であり、どれがコピーされた私であるのか、見分けがつかないほど精巧に復元できる。

また一方ではＤＮＡ操作により、同じＤＮＡを持った生物の複製も可能となっている科学技術。

そんな中、六十三億人とされる現代の地球市民にとって、二十一世紀の環境社会における自我とは、いかなる意味を持つのでしょうか？山岳という自然の中で会得できる感性から、どれほどのアイディンティティが形成できるのでしょうか。しかし私は、人類第四の極たる「人の心への探求」を求めてやみません。

それらは億人億様なＤＮＡ同様、ほんの僅かな並びの差異から、個体識別可能程度な違いしか生じません。しかし少なくとも五感で認識する生の情報と、第六感で感ずる仔細な情報とを組合せ、複製ではないオリジナリティを持った生の感覚判断を、私は持続したいと思っています。

環境の世紀に住まう人類の存続は、人類の持つ美意識の形成が共存の鍵となるでしょう。山岳とはまさに、自然という美の存在そのものであり、山岳と共に育てた山岳文化こそ、二十一世紀文化形成の柱となり得るのではないでしょうか。山岳文化は文化のあらゆる要素を含んでいるから。

田中文夫（たなかふみお）　一九四六年、神奈川県平塚市生まれ。建築設備士（JABMEE SENIOR）現在、㈱システム・デザイン代表取締役。㈱環境照明常務取締役。昔、山岳展望第二次編集同人。七四、七八年Ｐ２９南西壁、他。著書『青春のヒマラヤに学ぶ』（文芸社）、『頂きのかなたに』（日本文学館）、『ヒマラヤの贈り物』